

2020年7月7日

「高山のシカ問題」

南アルプスの光岳では、ニホンジカとライチョウがツーショットで写っています。

北岳でも、旧北岳小屋周辺には、シカによる過食圧のかかった植生が広がっています。

高山のお花畑にシカの過食圧がかかっています。

どうしてそんな高いところにまでシカが分布を広げることになったのでしょうか。

昭和30年代に始まった「拡大造林政策」という林野庁の政策があります。

自然林を伐採し、人工林化を進める政策でした。

薪炭から石油エネルギーへと燃料革命がおこり、薪炭林をスギやヒノキの人工林に置き換える施策でもありました。標高の高いところには、ブナを伐ってカラマツが植林されました。

南アルプスのスーパー林道問題も記憶に新しいところです。大量のブナ林が姿を消していった時代でした。

1951年の人工林面積が497万2千ヘクタール、30年後の1984年には、なんと2倍の1,011万1千ヘクタールにも達したのです。

森林の伐採に始まる木材を生産するという経済活動は、シカの主要な餌場の造成になったという話を知っている方がこの日本列島に何人おられるのでしょうか。

ヒノキの苗をシカが採食したり、剥皮して内樹皮を採食することに関して、箱根山地で調査を5年間行いました。伐採し、ヒノキの苗木を植え付けた新植地や林業を行うために造成した林道の法面がシカの主要な餌を供給する場になっていることを栄養分析で明らかにした論文です。

これを読んでいただければ、森林を伐採するとどんなことが発生するのか理解する基礎情報になると考えます。

森林を伐採すると良質な餌が集中分布すること、

季節的にその質量に大きな差があること、

餌量と利用するシカのバランスが崩れてくると栄養の乏しいスギやヒノキやササを採食しだすこと、

南アルプスのてっぺんまで分布を広げたこと、

管理のための捕獲が追いつかないことで分布が拡大していること

などなど

このデータは、いろいろなことを考える際の基礎となります。

森林での経済活動が、今や標高2400m以上のライチョウのいる世界にまで大きな影響を及ぼすようになってしまったのです。「シカが増加して大変だ」ではなくて、「シカを増やし続けすぎて、捕獲が追いつかなくなった」その結果、大変なのです。

適応能力の高いシカは高山まで進出し、季節的移動を繰り返しております。

神奈川県から助成金を得て、2015年から始めた箱根山地でのシカ調査も、5年経過しました。

データがまとまりつつあります。シカ対策に役に立てば幸いです。（古林賢恒）